

キュウリ (ウリ科)

病害が出やすいので栄養状態をよくして、病気にかからない強い草勢を保つことが大切。

作型	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
露地					保温 播種	定植	収穫						

1) 適地

キュウリは施設で年中生産されていますが、露地栽培では5月から9月まで栽培できます。しかし1回の定植で長期間収穫することは困難です。べと病、うどんこ病など病気が多いためです。草勢が衰えるとすぐに病気にやられてしまうので、長く強い草勢を保つために有機物に富んだ膨軟な耕土の深い畑が適しています。

2) 品種

露地用には夏どり用品種が適します。

白イボ系：北進、うずしお、つばさ、夏すずみ

四葉系：さちかぜ、鈴成四葉

地這用：霜知らず

その他：スライス

3) 作り方

【育苗】5月上旬に定植する場合は苗を購入し、5月下旬頃からであれば直播きもできます。育苗する場合、市販の育苗培土を充填した直径9cmポットに2粒ずつ播種します。覆土は1cm程度とし、十分に灌水したのちにハウスなど最低16℃程度温度が保てる場所で管理します。発芽して本葉が出たら1本に間引きます。ウリ科作物の連作になる圃場で栽培する場合には、必ず接木苗を購入して使用しましょう。

【圃場の準備】定植または播種の1か月前に1m²当たり堆肥2kg、苦土石灰100g、BMようりん50gを施用し深く耕しておきます。1週間前に緩効性肥料を100g施用したのち、1条植えて150cm幅の、2条植えて200cm幅の畝を立てます。定植の直前には1m²当たり50gの高度化成肥料を畝上に施用し、軽く耕します。必要に応じてマルチを張ってもよいでしょう。

【定植】本葉が4枚程度になったら、株間50~60cmで定植します。キュウリの根は細く、切れると簡単には再生しないため、定植時は鉢土を崩さないように注意するとともに、深植えにもならないようにしましょう。

【直播栽培】5月下旬以降であれば温度が高いため容易に発芽します。1か所3粒ずつ播種し、本葉が2~3枚でたら1本に間引きます。間引き後は移植苗と同様に管理します。

【支柱】定植が終わったら（直播では本葉4~5枚）支柱を立てます。市販のキュウリ

ネットも使用できますが、株が少なければ、竹か人工支柱と麻ひもで作ります。露地では風の被害を受けやすいので、支柱はしっかりと立てます。

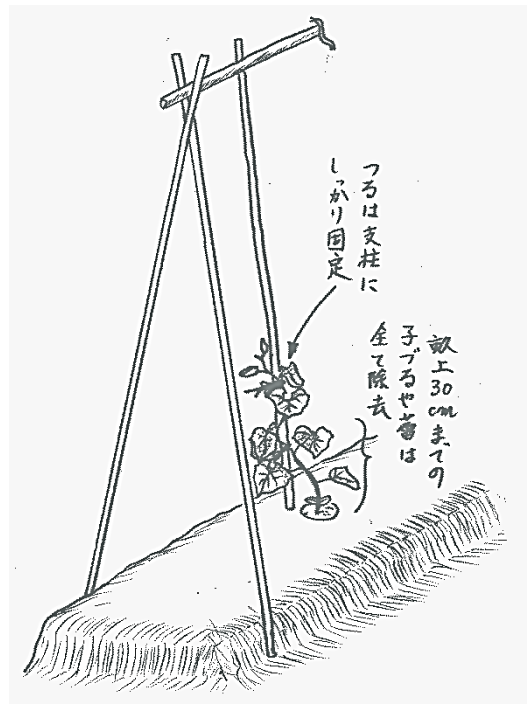
【誘引整枝】 親づるの地面からの高さ 30cm くらいまでに着生する子づるや花はすべて掻き取ります。親づるはまっすぐ伸ばし、目の高さくらいで摘芯します。下から出る強い子づるを 2 本伸ばし、他の子づるや孫づるは葉を 2 枚残して摘芯します。

【追肥】 生長が早く、肥料の吸収量も多いので、肥料切れしないように管理することが必要です。収穫始めから 2～3 週間毎に 1m² 当たり高度化成肥料を 20g 施します。乾燥時には、肥料を効かすためたっぷり灌水するとよいでしょう。

【収穫】 開花後の果実は急激に肥大するので、収穫は必ず毎日行います。とり遅れて果実が大きくなりすぎると、草勢が弱まってそれ以降の収穫量が大きく減少するので注意が必要です。

【その他の管理】 キュウリは根が浅く土の乾燥を嫌いますので、晴天が続く場合は灌水を行います。乾燥、雑草および泥はねから起こる病害防止のため、厚めに敷きワラを行うと草勢を長く維持でき、収穫期間を延ばすことができます。

【地這い栽培】 畝幅 200cm、株間 90cm と、立ちキュウリに比べてやや粗植えにします。株元近くの 5 節程度の子づるは掻き取りますが、その後の子づるは適当に配置するだけで摘芯の必要はありません。大ざっぱな管理と、台風など風で倒される心配がないのが利点です。



支柱の立て方とつるの固定

4) 病虫害防除

キュウリを農薬なしで作るのは非常に困難です。害虫としては、アブラムシ、アザミウマ類、ウリノメイガ、ハダニ類、コナジラミ類がよくつきます。病気では、うどんこ病が多発するほか、梅雨時や秋口にはべと病、褐斑病も発生し、大きな被害をもたらします。定期的に防除することが必要です。



キュウリ栽培圃場



ウリノメイガによる被害